夢幻回帰
となみ　湊

雨宿り－age9 Summer－

「さとちゃん、雨降りそうやわ。傘、持って行き」
「あ、うん。ありがとう」

　玄関先で差し出された傘を、僕は素直に受け取った。
大人用の、紺色の傘。走って帰るには少し邪魔だと思ったけれど、それは口に出さなかった。
初めての大きな傘。恐らく夕立が来ても濡れないようにとおばさんは思ったのだろう。

「慧（さとし）、またな」
「おう、明日もプール行くだろ？」
「うん、じゃあな」

玄関で同じクラスのマサに見送られながら、僕は今にも雨粒が落ちてきそうな、どんよりと暗い色をした空の下へ駆け出した。

（さと、今日は降るからね。早く帰って来りゃあよ）

　今朝、プールに出かける前に母ちゃんから掛けられた言葉が、頭の中をぐるぐる回っている。
家を出る時、空はとても晴れていた。学校のプールで遊んでいた時も、じりじりと日差しは照りつけていた。
とても雨が降るとは思えなかった。
でも、母ちゃんが「降る」と言った日は必ず雨が降るのだ。
そのことを忘れていたわけじゃないけど、僕はプールから帰った後、マサと一緒に昼寝をしてしまった。
僕らがのん気に寝ている間に、空は少しずつ陰っていったらしい。

「やっべぇ、もう降ってくる！」
辺りには雨の匂いが漂っている。もう雨が近い証拠だ。
雨の匂いの話をマサにすると、あいつはいつも笑う。雨の匂いなんかあるわけ無いって。
でも、僕の勘だって捨てたもんじゃない。

「母ちゃんに怒られる――――っっ！」
僕は息を切らせたまま走り続けた。
長くカーブが続く道――左側には山が迫り、立ち並ぶ木々の奥は暗くて見えない。
右手に続く白いガードレールの向こう側には、小さな川が流れている。
辺りにはお店も家も、何もない。ただひたすら伸びる一本道。これが僕らの通学路だ。

　ピカッ・・・！

「うわあぁっ」
突然目の前が光り、僕は思わず走っていた足を止めた。少しして、耳をつんざくような雷鳴が響いた。
そして大粒の、雨。
「あーあ、降ってきちゃったよ」
顔を打つ雨粒が痛い。
僕は右手に持っていた傘に気付き、慌てて広げようとした・・・が、傘の先が鈍く銀色に光ったのを見て、やめた。
（こんなの差して走ったら・・・やばいかな）
そう思うと怖くて、とても傘を広げる事ができない。
（どうしよう）
このままじゃずぶ濡れになる。辺りを見渡すと、少し先の斜面に広がる林の中に小さな屋根が見えた。
「あれ、なんだろ・・・まぁ、濡れなきゃいっか」
僕は雨を避けながら木々をくぐって一気に走っていった。
足元には背が高くなった雑草が茂り、半ズボンの足に当る。かゆいのを我慢して、僕はようやく、その小さな小屋まで近づいた。

「・・・ふう」
それは小屋というよりは祠と呼んだ方がいいような作りだった。小さくて、まだ背の低い僕でも少しかがまないと入れないほどだった。それでも少しばかりの屋根があるので雨はしのげる。
僕はできるだけ雨粒を振り払うと、小さな屋根の下でじっと雨が止むのを待った。
夏だから、寒くはない。でも濡れたままで身体に張り付いてくる服を早く脱ぎたかった。

「・・・うっ・・・ぐすっ・・・」

　どれくらいそこに居たか分からないけど、僕は小さな泣き声に気が付いた。
僕はそっと、声が聞える祠の裏を覗いた。

「ううぅ、ぐすっ・・・」
そこには僕よりももっと幼い女の子が座り込んでいた。
髪の毛も服も、ずぶ濡れだった。誰だろう？うつむいているので、顔が見えない。

「どうしたの？」
僕は声を掛けた。

もしかしたらこの場所はこの子が先に見つけたのだろうか、僕はそれを横取りしてしまったのかと思った。
「お母さん・・・」
女の子は僕の方に背中を向けたまま、小さな声で応えた。
「お母さんに雷が落ちたの」
「え？」
思いも寄らない答えに、僕はびっくりした。それじゃ、お母さんは黒焦げだ――突拍子のない女の子の言葉に、頭の中ではそんな事を考えていた。
「お母さん、もう起きてくれないの・・・？」
その子は寂しそうに呟く。そりゃ起きないだろう。本当に雷に打たれたのなら。
僕はどこか非現実的な雰囲気がする少女に近づき、そっと声を掛けた。
「元気出しなよ。今は哀しいだろうけど・・・元気になったら、一緒に遊ぼ？」

「ホントに？」
初めて振り返ったその子は、今まで見たことのない顔だった。こんな小さな田舎町で、知らない子が居るなんて・・・。
（転校生かな・・・？）
それなら新学期になれば、きっと学校で会えるだろう。
「ホントだよ。約束」
僕は、その子と指切りをした。
「ゆ～び切った！」
「切った！」

　そう言って小指を離した時、彼女はやっと少し笑った。
「雨、止んだよ」
その子が言うので、僕は空を見上げた。たくさんの滴をつけた葉の間から、くっきりと青空が見える。
「ほんとだ。僕、帰らなきゃ」
「またね」
「うん、約束」
「約束！」

　まるで何かの呪文のように、僕は心の中で「約束、またね」と繰り返した。
今まで何度もマサや学校のみんなと交わしている言葉だけど、今は少し違う気がした。

何か、秘密のような、特別な感じ。誰にも言いたくない、そんな感じ。
そして祠の中に傘を忘れたまま、急いで家に帰った。

「さと、遅かったねえ」
台所では、母ちゃんが夕ご飯の支度をしていた。時計を見ると、もう５時近くになっていた。
「あ～、うん」
僕は急いで服を脱ぐと、タオルを出して身体を拭いた。雨をぬぐって乾いた服を着ると、ほんのりと暖かい。
「さと？雨に当ったんか？」
突然、洗面所を覗きに来た母ちゃんは、僕を見て言った。
「あ、うん・・・ちょっとね」
「誰に会うた？」
「え？」
「帰ってくる途中で誰かに会ったやろ？」
きょとん、としている僕に、母ちゃんは自信満々の顔で言った。
「言うてみ、誰に会うたん？」
そう言われて、僕はあの子の名前を聞いていないことに気が付いた。
「誰って・・・知らん子・・・やけど」
「何か言うてた？」
どうして母ちゃんは何もかもを見透かすのだろう。僕はいつも、母ちゃんには隠し事ができない。
「ええと・・・」
「うん？」
「その子、お母さんが雷に打たれた、言うて泣いてた」
「そうか、どこで会うた？」
母ちゃんは僕の言葉を少しも変だとは思っていないみたいだった。
「ちっちゃい、祠のとこ」
「そうか・・・ほな、後でお参りに行こ。さと、案内してや」
「・・・うん」

　聞くだけ聞くと、母ちゃんはすぐに台所へ戻っていった。
（母ちゃんは、よう分からん・・・）
僕は脱いだ服を洗濯機に放り込むと、そのまま台所の隣りにある居間で母ちゃんを待った。

「さと、父ちゃんが帰って来る前に行こか」
しばらくして、母ちゃんが居間に顔を出した。

「うん」
僕は立ち上がり、何をしに行くのかよく分からないまま、玄関で濡れていない運動靴をはいた。

「よし、行こか」
ようやくやってきた母ちゃんは、手に少しの花と水を入れたビンを持っていた。
僕は母ちゃんから渡された花を握り締めながら、少し前に走ってきた道を戻った。
途中、母ちゃんは何も話さない。外はまだ明るいけれど、少しずつ夕暮れが近づいてきている。
祠が見える場所で立ち止まって指差すと、母ちゃんは黙ったまま林の中へと入っていく。
僕は母ちゃんの後を追いかけた。
「さと、この辺？」
「うん・・・」
だけど、小さな祠の裏にはもう女の子はいなかった。
（家に帰ったのかな？）
（どうして、ここで泣いていたんだろう・・・？）
僕がぼんやりしていると、母ちゃんは祠を離れて奥へ入っていく。

「あっ」
ようやく追いついたと思ったら突然、ぽっかりと空が見えて草むらが広がった。
そんなに広くはないけど、そこは明らかに人の手で作られた空間に見えた。
そして、その中央には、真っ二つに割れた大きな木が立っていた。

『お母さんに雷が落ちたの』

女の子の言葉を思い出す。
（まさか）
母ちゃんはそんな僕を気にも止めずに、その木へ近づいていく。
「やっぱりそういう事だったのか」
小さな声で呟いて、母ちゃんは手に持っていたビンの蓋を開けると、中に入っていた水を木にかけた。
「母ちゃん、これ、どういう事？」
僕は少し怖くなって聞いた。
「さとの前に現れたのは、このご神木の精霊――と言っても、さとには難しいか。まあ、木の精やな。ほれ、そこの枝を見てみ」
母ちゃんは、二つに割れた木の左側に伸びている大きな枝を指す。僕は言われた場所をそっと覗き込んだ。
他の枝はもう枯れてこげ茶色になっているのに、その枝は緑色の葉っぱがついていた。

「これは？」
「それは、この木の新芽。そこからまた、この木の新しい命が始まる」
そう言うと、母ちゃんは小さく何かを呟きながら、手に持っていた剪定バサミでその枝を切った。
「そんな事していいん！？」
驚いた僕が聞くと、母ちゃんはにっこりと笑った。

「大丈夫。こうやって根元に挿しておけば、この枝は大きくなるんよ」
そして、僕に持っている花を添えるように言った。

「あの祠は、この木を祭ってあるんだよ。さとは知らなかったんやね」
「うん」
「この木は、ずっと昔からあるここの村のご神木やからね。さとも覚えておき」
斜面を降りながら、母ちゃんはそんな事を話していた。
僕は、こんな場所にあんなに大きな木が立っている事も知らなかった。なぜ、母ちゃんがあの木の事を知っているのかもわからない。
ただ、あの女の子にはもう会えない事がわかって寂しかった。

「ありがとう。また、会えるよ」

祠の横を通り過ぎて、通りに降りたとき、不意にあの子の声が聞えた気がした。
「え？」
足を止めた僕に、母ちゃんが振り返る。
「どうした？さと」
「ううん・・・何でもない」
僕はそっと祠を振り返った。

（またね、約束だよ！）

心の中で、そう呟きながら

＜　完　＞

彼岸－age22－

「お客さん、悪いけど終点なんで」
「え？」
僕はシートから慌てて身体を起こし、窓の外を見た。いつの間にかうとうととしていたらしく、気が付くとバスは村の入り口で停車している。
９月になったとはいえ、昼の日差しは強い。外では見覚えのある風景が風にそよいでいる。
（おかしいな、もっと奥までバス亭があるのに）
不思議に思いながら、財布を取り出す。車内の運賃表には二千円近い金額が表示されている。
「お客さん、この辺の人かい？」
思ったより人懐こそうなバスの運転手が話し掛けてきた。
「あ、この奥に実家があるんで・・・」
「ああ、そうかい。お彼岸に帰って来るなんて、学生さんにしては感心だねぇ」
運転手は嬉しそうに笑った。
僕は、何故自分が学生だと分かったのだろうと思い、すぐにその理由を悟った。
紺色のリクルートスーツをこの時期に着ているヤツなんて、就職を控えた学生以外にあり得ない。
返事をする代わりに少し照れくさそうに笑うと、運転手は最近のコースの見直しで、この奥まで行くバスは２時間に１本に減ったのだと教えてくれた。
「若い子はみんな出て行っちゃうからねぇ」
そう言った時だけ、少し寂しそうだった。

　お金を払ってバスを降りると、家の方へ続く道を歩き出した。車内の冷房に慣れていた肌が一気に汗ばんでいく。
その直後に風が吹き、じっとりとした熱を吹き去っていった。
今年は残暑が厳しい。僕が通う大学がある都市もいつまでも蒸し暑くて、正直言ってバテ気味だった。
でもやっぱり、この辺りではすでに涼しい風が吹いている。どこか懐かしい風の匂い・・・。
僕は何だか嬉しくなって、紺色の上着を脱ぐと右肩にかつぐようにして歩き始めた。
どうせ一本道だし、途中で奥まで走るバスが通ったら、そこで乗せて貰えばいい。
今日は実家に一泊する予定なので他に急ぐような用もない――気楽な散歩だった。

　山の間をひぐらしの声が、右から左からと響いていく。時折混ざる川のせせらぎ、鳥の羽音。
見上げれば空は高く、そして真っ青に澄んでいる。
（街には無い音。街には無い風景・・・）
僕はぼんやりと考えながら、ガードレールに沿って歩いていく。
左手に見える土手には、ところどころに彼岸花が群生していて、紅い色を辺りに散らしていた。

「あれ、あんな処に？」
３０分程歩いたところで、ちょうど日陰になった場所に石段が見えた。
普段はバスに乗って通り過ぎてしまう場所なので、僕はそこに石段がある事など知らなかった。
「ちょうどいいや、休ませてもらおう」
僕は井戸か何かがあれば手を洗わせてもらおうと考えて、７段ほどしかない石段を上がった。
しかしそこには既に建物はなく、朽ちて傾いた卒塔婆が無数に並んでいるだけだった。

木々に囲まれた墓地はもう随分誰も入らなかったようで、供えられた花も茶色くなって筒から垂れ下がっている。
（村の入り口でさえも、人がいなくなってるんだ・・・）
しん、と静まった空気。何の気配も感じない、ひっそりと消えていきそうな空間。
ここに眠る人達は、ずっとこのまま草木に囲まれて忘れられていくのだろうか。

そこまで考えて、それ以上深く追求するのは止めた。
僕は昔から、なぜか不思議な事に縁がある。
それは僕の家――夏目家に生まれるものにはよくある事だと聞いている。
だから世間で言う幽霊や心霊現象などは、全然怖いと思わない。
でも「彼ら」に対して、むやみに同情の気持ちや思い入れを持ってはいけないという事も判っていた。

僕は石段の最上段に座り、ハンカチで額の汗を拭った。石段の下方を見ると老婆が座って休んでいる。
老婆はすぐに僕に気付き、にこりと笑いかけて頭を下げた。
「冷やこいお茶があるけども、飲むかえ？」
その左手には、よく水筒に付いている形のコップが握られていて、中には褐色の液体が注がれていた。
「あ、頂きます」
咽喉が乾いていたので慌てて石段を降り、老婆からコップを受取った。
「まあ慌てんと、ほれ、そこにでも座って飲みなせぇ」
老婆は僕が一気にお茶を飲み干したのを見て笑った。よく冷えた麦茶は、つ、と心地よく咽喉を通り抜けていく。
「すみません、ありがとうございました」
僕は口を付けた場所を親指で拭うと、コップを彼女に渡した。
老婆は今から畑にでも行くのか、藍色のつむぎと少し色あせたもんぺを履いている。傍らには麦藁帽子があった。
街では見かけない格好だけど、この辺りではごく普通の服装だ。

「お前さん、見かけん顔じゃの」
老婆は笑顔のままで言った。
僕は高校は市内の、大学は県外の学校に通っていたため、しばらくこの土地を離れて一人暮らしをしているのだと話した。
老婆がどこまで理解できたかは判らない。それでも彼女は頷きながら僕の話を聞いていた。
「へえ、じゃあお前さんは夏目の家の者なんだねえ。道理で目の色が違うと思うた」
「え？」
そんな事は今まで思ったことも無いし、他人から言われたのも初めてだ。
しかも夏目の家を知っている・・・？僕は不思議に思って老婆の顔を見た。
老婆はじっと僕の顔を見て、そして言った。
「何か悩んどる顔じゃの」
図星だった。
僕はこの村に帰って就職するか、今暮らす街にそのまま留まるかを悩み、そして決めかねていたのだから――。
「どうして、それを？」
「なぁに顔を見りゃすぐに分かるわな。それはそんなに急いで決めんといかんのかえ？」
老婆は僕の悩みなど知らない。それなのに、まるで知っているかのように話をしていた。
「いや・・・でも春までには決めないと」
そう、春までに。この村に帰ってくるのか。それとも、あの街で働くのか。
どちらも不可能ではないだけに、余計に僕は迷っていた。
ただ気になっているのは、家を出る事になった時の母の言葉。

――もう、一緒に暮らす事はあらへんかもしれんなぁ・・・
普段はとてもサバサバした母の些細な一言に、僕はハッとした。
そしてその時、僕は笑って答えたのだ。そんな事ないよ、と。

「春、か・・・」

老婆はそう言うと、ふう、と溜息をついた。
「まあ、せいぜい悩むがいいじゃろて」
そう言いながら、腰を上げる。麦藁帽子に手を伸ばす。
「はあ」
他人事だと思って、と僕は少しムッとする。確かに僕はこの老婆が誰なのかも知らないが。
「じゃあ春の彼岸にまだ悩んでいたんなら、もう一度ここへ来んさい」
「ここへ？」
「その時に忘れてしまったなら、それも良し。解決したなら、それも良し」
「ふうん・・・」
僕は判ったような判らないような返事をして、僕とは反対の方へと歩いていく老婆の姿を見送った。
涼しい風に彼岸花が揺れていた。

そして、３月――。

僕は幼馴染のマサの車に乗って実家へと向かっていた。
春の彼岸に僕が帰省する事を知ったマサが、事前に電話を掛けてきてくれたのだ。
「バスだと随分待たされるもんな。迎えに来てくれて助かったよ」
「本数少ないし、金もかかるしなぁ！」
僕が言うとマサは、ははっと笑った。
マサはずっとここで暮らし、今は父親の整備工を手伝っている。
昔からマサは車が好きだったから、恐らく彼の進路に迷いはなかっただろう。
「で、結局お前、どこに就職すんだよ？うちの役場じゃないやろ？」
小さい村なので誰が戻ってきただの誰が役場に入っただのという噂はすぐに広まってしまう。
確かに僕は、この村で働くなら役場に入ろうと思っていた。実際に採用試験も受けた。でも――。
「ああ、役場じゃない」
「落とされたんか！？」
「アホ言うな」
試験には合格したし、その時は本気でこの村に戻ってこようと思っていた。
でも僕は結局、都市にある企業を選んだ・・・その顛末を話すと、マサは大声で笑った。
「まあ、いいんじゃねえ？やりたい事をやればええやん」

その時、運転席の向こうにあの石段が見えた。流れていく景色の中で、そこだけが一瞬止まって見えた。
なぜかそのまま通り過ぎてはいけないような気がした。
「マサ、ちょっと止めてくれ」
「ああっ？」
僕の大声に慌てたマサは、急ブレーキを踏んだまま脇に車を停車させた。

「何だよ急に・・・」
「ちょっと、すぐ戻るから」
そう言うと僕は車から降りて、さっき見た石段まで走った。
(・・・やっぱりいない、か)
石段の辺りを見渡しても、あの時に会った老婆の姿は無い。
当然だ。
あれから半年も経っているし、いつ僕がここに来るかなんて話したわけでも、約束をしたわけでもない。
いるはずが無い。だけど、何となく居るような気がした。

その時、目の前に一片の花びらが舞い落ちた。
淡いピンクの桜。
「・・・えっ」
僕は思わず、石段を見上げ、駆け上がった。そこには、墓地を覆って咲く満開の桜が――。
「嘘だ、だってまだ３月・・・」
この地方じゃ、３月に桜が咲くなんてほとんどない。

「久しぶりじゃな」
桜に圧倒されて立ち尽くしていると、後ろから声がした。振り返ると、そこにはあの老婆が立っていた。
「今、お前さんにはどんな景色が見えるかの？」
老婆は笑っている。この桜を不思議に思わないのか、ただ真っ直ぐに僕を見ている。
僕は素直に見える景色を答えた。そうしている間にも、花びらはひらりひらりと散っていく。
「ここの景色はお前さんの心そのもの。前に来た時は、かなり寂れた場所に見えたろうに」
老婆は後ろに手を組み、少し前かがみになって立っている。
しかし、その声はとてもよく僕の耳に届いた。
「悩みはもう解決したんじゃろ」
「はい・・・でも」
「まだ迷うとるのか？」
「いえ・・・」
僕は、とても不思議な気持ちだった。今まで気にしていた、この村で暮らす母への気持ちや故郷を離れて暮らしていこうと決めた時の覚悟にも似た感情などが、すべて心の中で浮かんでは消えて行く。

「それでいいんじゃよ」

老婆は優しく笑った。
「この村を離れて暮らすことになっても、お前さんがこの村を忘れるわけではないじゃろうて。
　帰ってこようと思えばいつでも来れる――この村はお前さんを忘れたりはせんでのう。
　お前さんは自分の行きたい道を進めばええ」

そして勢いよく風が吹き抜け、僕を取り囲むようにしてたくさんの花びらを舞わせた。
僕は目を閉じた。不思議と、心が軽くなっていた。

再び目を開けたとき、老婆の姿は無かった。

「悪い、待たせたな」
助手席のドアを開けると、マサはうとうとしていたのか慌てて顔を上げた。

「なあ、あそこに何があったんだ？」
「別に。ああ、桜が満開できれいだったよ」
僕がそう答えると、マサは怪訝そうにバックミラーに映る景色を確認しながら笑った。
「何言ってんだよ、桜はまだ先だ。いいとこ蕾だろ？」
僕は何も言わず、ただ笑った。

また、ここへ帰って来た時には、あの老婆へ会いに行こう。
今度はどんな景色が僕を待つのか――少し楽しみだと思った。

< 完 >